

大腸菌のように、自分の分身を単純に複製する「無性生殖」で増える細胞には寿命はありません。しかし、クローン増殖では多様性は望めませんので、私たちの祖先は20億年も前に「有性生殖」を始めました。個体の寿命はその代償として作り出されたのです。がん細胞は遺伝子の経年劣化によって死の仕組みが壊れ、原始的な細胞に「先祖返り」したものと言えます。

有性生殖をする個体の死は進化の過程で自らつくった手段ですから、自然なものです。ある程度の脳を持った動物、例えば猫でさえも「自分が死ぬこと」を恐れているとは思えません。それどころか「自分もいつかは死ぬ」こと

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

厳密には「完治」なく

20年後に再発するケースもあるので、厳密にはがんに「完治」はありません。

しかし5年間再発がなければ、便宜上治癒と考えるのが一般的です。このため「5年生存率」を治癒率の代わりに使うことが多いのですが、乳がんのように、後々まで再発の可能性が残るがんでは、10年生存率が使われます。ただ

は再発しやすいがんの代表です。私のように最も早期でも1年以内の再発率は24%、5年以内では46%に上ります。

最近では余命6か月などと医師が「残り時間」を口にするのも多くなっています。がん患者は時間に管理される存在になったかのようです。

私の場合も他の早期がんと同様、症状などありませんでしたが、手術後は排尿時の痛みが続いています。早期発見は当面の生活の質の悪化と引き換えに、将来の時間を手にする行為といえるでしょう。

ただ、未来は常に不透明です。がんとのつき合いが簡単ではない理由の一つがここにあります。

すら分かっていないでしょう。猫の脳は死を怖がるほど発達していないのです。

ところが、人間は脳を非常に進化させた結果、「ある時間が経てば自分が死ぬ」こ

とを知ってしまいました。このことが、死の恐怖の根源だと思えます。

それ自体も脳の産物といえますが「時間」はがんの医療でも重大な役割を持ちます。

5年にせよ、10年にせよ、数字自体に深い意味があるわけはありません。便宜上、「キリの良い」数字を使っているにすぎません。

私も経験したばつこうがん

(東京大学病院准教授)